



栃木県佐野市

学力調査を起点にR-PDCAサイクルを回すことで、学力向上につなげる

栃木県佐野市では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」、栃木県「とちぎっ子学習状況調査」、そして、「佐野市総合学力調査」という3つのアセスメントを実施している。結果返却時には、全小・中学校の学習指導主任を集め、分析報告会を開き、各校はその分析結果を生かしながら、子どもたちの学力向上に向けた指導改善を実施している。

栃木県佐野市

◎栃木県南西部に位置する佐野市は、2005年2月に旧佐野市、旧田沼町、旧葛生町が合併して現在の形になった。佐野市ブランドキャラクター「さのまる」、佐野厄除け大師、佐野プレミアムアウトレット®、佐野ラーメン、いもフライなどが有名。面積/約356.07 km² 人口/約12.1万人 小学校/27校 中学校/10校 児童生徒数/8,880人
教育委員会 所在地 〒327-0398 栃木県佐野市田沼町974
 電話 0283-61-1171 (代表)
 URL <http://www.schoolnet-sano.ed.jp/kyoiku-c/> (教育センター)

教育長インタビュー

学力調査を組織的に活用し 学校力を高めていく

佐野市教育委員会 教育長 **岩上日出男**

「一校一改革一挑戦」で 指導力向上を推進

佐野市では、「心豊かで、自ら学び、たくましく生きる児童生徒の育成」を目指し、①豊かな人間性や社会性を育てる教育〈豊かな心〉、②主体性と創造性を育てる教育〈確かな学力〉、③たくましく生きるための体力と実践力を育てるための教育〈健やかな体〉を重点目標に掲げ、教育活動を推進しています。

特色ある取り組みとしては、2013

年度から、学力・体力向上のための「一校一改革一挑戦」を行っています。「一改革」では各校が従来から行っている取り組みを改善し、「一挑戦」では学校の独自性を生かした新たな活動を推進しようというものです。例えば、体力の向上面では、一輪車の乗り方の指導やサーキットトレーニングの実施など、校風や環境を生かした「一挑戦」に取り組んでいます。最近では、各校の取り組みが他校への刺激となり、教育活動が活性化されていると感じています。



いわかみ・ひでお 順天堂大体育学部卒業後、中学校教諭として教職をスタート。安足教育事務所長、佐野市立城東中学校長などを歴任し、2013年から現職。河野謙三賞、関東中学校陸上競技指導者功労賞、スポーツ指導者功労賞などを受賞。2012年には栃木県教育委員会より教育功労者として表彰された。

学力調査を「チーム学校」としての意識共有にも活用

「確かな学力」を付けるための起爆剤となるのが、学力調査だと考えます。調査によって、児童・生徒の学力や意識、生活の実態を洗い出し、そこから浮かび上がってくる課題を校内で共有してこそ、現状を打開する改善策が立てられるからです。

市で一斉に行うアセスメントには、文部科学省「全国学力・学習状況調査」、栃木県「とちぎっ子学習状況調査」、そして、「佐野市総合学力調査」の3つがあります。いずれの調査結果も、教育委員会で分析し、各校に伝えていきます。ただ、学校や学年、学級によって、それぞれ状況は異なりますし、各校が課題を自分のこととして捉えないと、改革は進みません。そこで、佐野市教育センターでは、各校の学習指導主任による会議で、市全体の結果分析を報告するとともに、各校が自校の結果を分析するための支援を行っています。

学力調査の結果から自校の課題を明らかにし、改善策を考える過程では、各校とも全教員で取り組むこととなります。つまり、学校が一丸となって組織的・協働的に取り組むことによって、「チーム学校」としての意識が高まり、「学校力」が向上していくのだと実感しています。

学校訪問や調査・研究を通じて学校を積極的に支援

学力向上の取り組みでは、指導主事らが学校を直接支援することも重視しています。栃木県では、2014年度から「とちぎっ子学力アッププロジェクト」を行っており、県の「学力向上アドバイザー」が3年間を掛けて県下の全校を訪問しています。その際には、市の指導主事や校長経

図1 佐野市が推進する「凡事徹底」の例

児童・生徒の当たり前のこと

- ・自分から元気にあいさつする
- ・親や先生の話聞く
- ・きまりや約束を守る
- ・家の手伝いをする

保護者の当たり前のこと

- ・良いことをほめ、悪いことは叱る
- ・我が家のきまりをつくり、実行する
- ・子どもの話に耳と心を傾ける
- ・朝ごはん、生活のリズムを整える

教師の当たり前のこと

- ・児童生徒へ声を掛ける
- ・愛情をもって、ほめる・叱る
- ・情熱、使命感を忘れない
- ・常に教師が率先垂範する

地域の当たり前のこと

- ・大人が率先してあいさつする
- ・家の周りを掃除する
- ・地域の行事に積極的に参加する
- ・子どもに良い手本を示す

*佐野市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

験者である学校教育指導員が同行し、学校とともに学校ごとの調査分析の支援や授業改善の支援などに取り組んでいます。

更に、教育委員会では、毎年37の公立小・中学校全てを訪問し、授業研究会を各校で1回以上行っています。また、学校の希望に応じて、指導案づくりから教員と指導主事が協働で行うことも試みています。例えば、2014年度に小学校国語で言語活動の指導案を協働で作上げたところ、多くの学校で採用されたことがありました。指導主事にとっても、教員の指導力が高まり、現場が活気づく様子を肌で感じられる機会なので、積極的にかかわっています。

教育委員会では、ほかにも「学習指導」「教育の情報化」「特別支援教育」「体力向上」の4つの分野で「調査研究委員会」を立ち上げて、調査・研究を行っています。これは、市内小・中学校から毎年メンバーを替えて集まった先生方と取り組んでいます。その中でも、「学習指導」と「教育の情報化」の調査研究委員会では、子どもたちの思考力・判断力・表現力などを育成するための授業改善やICT機器の活用について調査研究し、

その成果を全校に発信しています。

2013年度からは、小中一貫教育を導入し、研究実践を進めています。中学校区ごとに、小中合同の研修会や授業研究会を行ったり、中学生が小学校に出向いて勉強を教えたりといったことを進めています。近隣に公立・私立の中高一貫校が出来たこともあり、各校の特色化を進めるとともに、学校公開なども積極的に行うようになりました。

当たり前のことを当たり前にする「凡事徹底」を大切に

このようにさまざまな施策を行っていますが、私が子どもたちや教職員に最も大切にしてほしいことは、「凡事徹底」です(図1)。あいさつをする、人の話を聞く、相手を思いやる、いじめをしない、時間を守る、靴を並べる、掃除をする……日常生活をする上で欠かせない、これら当たり前のことを行うのは誰にでも出来るはずですが、それを継続することが、子どもの成長に良い効果をもたらすものと考えます。

学力向上に向けた施策も、指導の基本である「当たり前のこと」を大切にして進めていきたいと思っています。

教育委員会の取り組み

3種類のアセスメントを活用し、 課題発見→全教員で対策→成果につなげる

全学年で学力調査を実施し 全教員の改革意識を喚起する

佐野市では、市立の全小・中学校で国・県・市の3つの学力調査を行っている。教育委員会では、3種類の調査を次のように位置付けている。

国と県の調査は、毎年4月に行われる。県の調査は、「とちぎっ子学力アッププロジェクト」の一環として行っているもので、対象は小学4・5年生と中学2年生だ。

「この2つの調査は、年度当初に行われるため、新たに編成された学級の子どもたちの学力や学習への意識の状況を把握できます。また、国や県から出される授業改善のためのさまざまな資料を、その後の授業実践につながるように活用しています」と、学校教育課指導係の館野道明指導主事は説明する。

ただ、国と県の調査では実施対象とならない学年があるため、教育委

員会では、市独自の学力調査として、中学3年生以外の全ての児童・生徒を対象に、毎年12月にベネッセの学力調査を用いた「佐野市総合学力調査」を行っている（2013年度までは1月に実施）。4月に行われる国や県の調査結果を基にして、各校が日々の授業で工夫・改善したことが、子どもの学力向上につながっているかどうかを、市の調査で把握し、次年度の学習指導計画に生かしていくという、R-PDCAサイクルの「R」として位置付けている（図2）。

更に、教育センターの大歳勝也指導主事は、市が独自に調査を行う意義について次のように説明する。

「学校が組織的に学力向上の施策に取り組むためには、全ての先生に授業改善の意識を高めてもらうことが重要です。しかし、国や県の調査対

象とならない学年を受け持つ教員は、どうしても当事者意識をもちづらく、授業改善のための資料もあまり見てもらえない傾向がありました。また、実施対象の学年であっても、前年度から担任が替わっている場合もあり、4月時点の調査では、前年度の取り組みが本年度の結果にどのような影響を及ぼしているのかが見えにくいという課題もあったのです」

佐野市総合学力調査は、全学年で統一の学力調査を行い、同じ指標で子どもの課題を把握すると同時に、全教員に授業改善に向けた意識をもってもらうことをねらいとする。

また、学校ごと・学級ごとの学力や、同時に行われる意識調査の結果が詳細に見られるため、自校の課題が見えやすく、担任が自分の指導を振り返る際にも使いやすいという利点が

図2 学力調査を軸とした指導改善のR-PDCA サイクル

Research 実態把握

- ・「佐野市総合学力調査」（12月実施）

小学1～6年生、国語・社会・算数・理科（理・社は4年生以上）、学習意識調査
中学1・2年生、国語・社会・数学・理科・英語、学習意識調査

Plan 次年度の計画を立てる

Do 日々の教育活動

Check 2つの調査で分析・評価

- ・文部科学省「全国学力・学習状況調査」（4月実施）

小学6年生、国語・算数・理科、質問紙調査
中学3年生、国語・数学・理科、質問紙調査

- ・栃木県「とちぎっ子学習状況調査」（4月実施）

小学4・5年生、国語・算数・理科、質問紙調査
中学2年生、国語・社会・数学・理科・英語、質問紙調査

Action 日々の授業で工夫改善

*佐野市教育委員会提供資料を基に編集部で作成



佐野市教育委員会
学校教育課
指導係指導主事
館野道明

たての・みちあき

「子どもと先生が自信を持てるように支援していきたい」

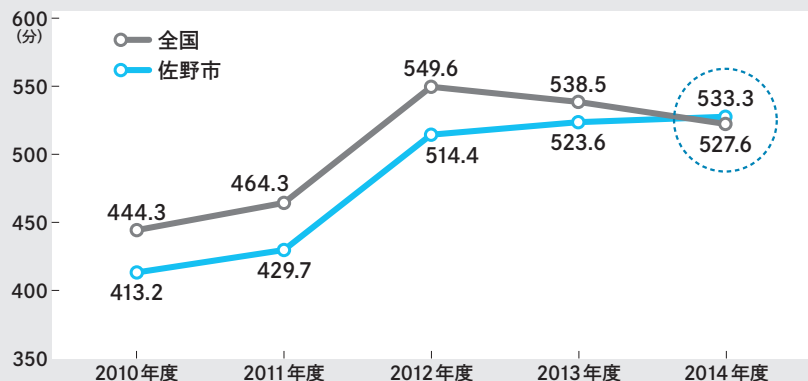


佐野市教育委員会
教育センター指導主事
大歳勝也

おおとし・かつや

「子ども、学校、先生のために、汗をかいていきたい」

図3 家庭学習時間の合計（小学1年生～中学2年生の1週間当たりの平均）



*佐野市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

ある。それらのデータはウェブ分析システム（SYEN）で幅広く、深く分析でき、全国や過年度との比較も可能だ。そのため、各校の学習指導主任らを対象とした、ベネッセの担当者による使い方の説明会を開くなどして、活用を促進している。

学力二極化の背景に 家庭学習時間の短さ

市全体の分析結果を校長会や学習指導主任会議で報告し、そこで出てきた課題に、各校が自校の状況に応じて対策に取り組んでいく。そうしたサイクルが、最近になってようやくうまく回るようになってきた。

例えば、教育委員会では、2012年度から「佐野市の子どもの学力向上のすすめ」として、家庭学習習慣の定着に力を入れている。学力調査では、市の平均点は全国平均と同程度だったが、達成率が低く、学力上位層と下位層が乖離する二極化の傾向が見られた。しかも、小学校高学年、中学校と学年が上がるにつれ、その差が拡大する傾向にあった。

下位層の底上げを図るためには、基礎・基本の定着が欠かせない。ところが、どの学年においても、家庭学習時間が全国平均より大幅に短く、テレビやゲームの時間が全国平均よ

り長いという傾向が見られた。

そこで、子どもや保護者、教員の家庭学習に対する意識を変えていこうと、市の方針として、家庭学習の目標時間を、小学生は学年×10分+30分、中学生はどの学年も2時間以上とし、各校に推奨した。

「学年が上がるにしたがって、苦手克服や得意伸長など、自分で課題を見つけて学習する時間が大切になります。30分は宿題の時間、学年×10分を自習の時間と捉えて設定しました」（大歳指導主事）

家庭学習の定着には、保護者の協力が欠かせない。そこで、学校が保護者会でも使えるよう、家庭学習を啓発するプリントと、保護者が子どもと一緒に日常生活を見直すことが出来るチェックシートを作成した。更に、テレビやゲームの時間を学習に充ててもらおうと、「ノーテレビ・デー」の設定を呼び掛けた。

「中学校の定期テストに合わせて、兄弟姉妹がテレビやゲームをせず、家庭学習に取り組めるよう、同じ中学校区の小・中学校で同じ日に設定するところもあります。家族全員で協力しようという意識も生まれているようです」（館野指導主事）

また、教育委員会主催の学習指導調査研究委員会では、2012年度か

ら2年間、家庭学習の指導をテーマに研究を行った。その成果として、「自主学習カレンダー」「自主学習ノートづくり方」などとともに、自主学習に使える問題プリント集「すぐプリ」を作成し、各校に配布した。2014年度から、小学校の朝学習など各校で活用されており、「使いやすい」という声が出ているという。

家庭学習時間が全国平均を上回り、学力も上昇傾向

2014年12月に行った佐野市総合学力調査では、小中8学年合計の週当たりの家庭学習時間が、初めて全国平均を上回った（図3）。学年別に見ると、小学6年生～中学2年生で上回っており、一方でゲームの時間は同じ学年で下回るなど、小学校高学年、中学生で学習意欲が向上している様子が見られた。

学力面でも効果が出始めている。2014年度の文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、平均正答率が2ポイント上がった。少しずつではあるが、学力が底上げされつつあると、教育委員会では捉えている。

今後の課題は、思考力・判断力・表現力などの育成だ。全国学力・学習状況調査においてB（活用）問題の無答率が高いという結果を受けて、2015年度の学習指導調査研究委員会では、研究テーマを「発達の段階や教科の特性を生かした思考力、判断力、表現力等を育む授業づくり」とした。

「今、文部科学省で大学入試改革が検討されていますが、今の小・中学生が大学入試を受ける頃には、思考力や表現力などが重視されるようです。そういう状況も見据えつつ、先生方が現状を踏まえて改善策を打ち出せるような支援をしていきたいと思えます」（大歳指導主事）

小学校での実践

学力調査の結果を基に 言語活動に焦点を当て、 協働研究で指導力を高める

佐野市立植野小学校

◎ 1873 (明治6) 年創立。教育目標は「じょうぶな子、よく考える子、ねばり強い子、思い合う子」。すずかけの木をシンボルツリーに校内緑化にも力を入れる。公開研究会を11月13日に実施予定。

校長 津布久貞夫先生

児童数 760人

学級数 27学級 (うち特別支援学級5)

住所 〒327-0832 栃木県佐野市植上町1272

電話 0283-23-0711

URL <http://www.schoolnet-sano.ed.jp/ueno-e/>



学力調査の結果から 言語活動に注力する

2014年度から2年間、佐野市教育委員会「学習指導研究推進校」に指定された佐野市立植野小学校は、「自ら考え、表現し、学び合う児童の育成～国語科における単元を貫く言語活動の明確化を通して～」をテーマに研究を推進している。津布久貞夫校長は、その背景について次のように説明する。

「2年前の佐野市総合学力調査の結果を見ると、全国や佐野市の平均点と比べて、出題形式では『記述式』、観点別では『書く力』において、本校の平均点が低い傾向にありました。普段の子どもたちの様子を見ても、授業で機会があってもなかなか発言できなったり、トラブルがあっても自分でうまく説明できなったりといったことがあったため、生活全般において、子どもの表現力を高め

る必要性を強く感じていました」

この研究には、もう一つねらいがある。同校は市内で2番目に児童数が多いこともあり、新任教員が毎年2人程度配置され、若手の育成が急務だ。そのため、1学年の担任団が、なるべくベテラン、中堅、若手という構成になるように配置している。その学年全体で1単元分の国語の授業を協働で研究し、授業改善を通して、若手教員の指導力向上を目指したのだ。更に、学習指導主任の印出知子先生は、他の教員を巻き込むのに学力調査が有効だったと語る。

「市の調査は全学年で実施しているため、全学年共通で見いだした課題には全ての担任に説得力があると考えました。実際、各教員とも当事者意識を持って取り組んでいます」

1単元の指導案を 学年全体で練り上げる

研究の進め方の最大の特徴は、学

年単位での話し合いの場が何度もあることだ(図4)。「単元を貫く」の言葉どおり、学年で取り上げる単元を1つ決め、単元構成を考えて、指導案を練り上げる。そして、他学年の教員が参観する研究授業は、単元の導入、中間、まとめの3～4回をそれぞれ違うクラスで行う。各研究授業当日までに、他のクラスで指導案を基に授業を行い、そこでの子どもたちの様子や成果、課題を学年内で共有し、改善していくのだ。

「単元計画を立て始めるのは研究授業初日の約1か月前、そして研究授業は約1か月にわたって行います。この間、学年の先生たちは毎日のように情報交換をし、話し合い、まさしく協働して一つの授業をつくり上げていきます」(印出先生)

学年の教員全員で練り上げた授業でも、授業研究会(写真1)では授業を参観した他学年の教員からさまざまな意見が出てくる。そうした過程全てが、教員の指導力を高めていくと、津布久校長は感じている。

「私が指導力に課題を感じていた若手の教員も、めあての提示の仕方、板書の構成、授業の進め方など、年度の終わりまでには確実に良くなっていきました。一方、子どもたちのノートも誰が見ても分かりやすく書かれるようになり、授業の内容を理解して自分の考えを書いていることがうかがえます。そうした姿を見ると、この研究授業には、子どもたちの力を伸ばす指導のノウハウがたくさん詰まっているのだと思います。毎年、この活動を積み上げていけば、教員の大きな財産になるでしょう」

また、学年横断の部会として、「授業研究部」「環境整備部」「授業外研究部」「調査分析・編集部」を立ち上げた。各学年から1～2人の教員が各部会の担当となり、部会で話し合っ

図4 研究授業の進め方

① 指導案発表会

他学年の教員に、指導案、授業の視点を記したレジュメ、授業で使用する資料などを示し、単元の内容を説明。参観者が授業内容を理解した上で臨めるよう、疑問点を出し、意見交換をする。

② 研究授業

単元の導入、中間、まとめで、それぞれ違うクラスが授業をする。参観者は、1つの単元で3～4回行われる研究授業を可能な範囲で参観する。参観して気付いたことを付せんに書き(○は良いこと、△は課題と印を付ける)、授業後に廊下に掲示される指導案を拡大コピーした模造紙に貼っていく。

③ 学年内授業研究会

研究授業後はなるべく当日中に、学年内授業研究会を行う。参観者が書いた付せんに、学年内でも付せんを書き足して、意見交換をする。

④ 授業研究会

単元終了後、他学年の教員を交えて授業研究会を行う。学年内授業研究会で出した成果と課題を説明し、付せんの付いたままの指導案の模造紙や、授業で使ったワークシートなどを示しながら全体で意見交換をする。



写真1 授業研究会の様子。

*植野小学校提供資料を基に編集部で作成

た内容を学年に持ち帰り、指導に反映させている。このように、教員1人の知識や経験では発想が限られてしまうところを、学年を中心とした全教員の知識と経験、発想と工夫を十分に生かせるようにしている。

学力調査の結果を生かしてさまざまな取り組みを行う

学力調査は子どもの復習にも活用されている。国、県、市のいずれの調査も、子どもに結果を返却後、自分の苦手分野を確認させ、県の調査では「フォローアップシート」、市の調査では復習プリントに取り組ませている。特に、市の調査は2月に結果が返却されるため、進級までに当該学年の学習事項をしっかり身に付けさせることに役立つ。

また、学力調査の結果からは、毎

日読書をする子どもが少ないという課題も見えた。そこで、学校が推薦する本を「植野小の100冊」として子どもたちに提示し、多様なジャンルの本に目を向けられるきっかけをつくった。更に、授業では、国語の単元と関連する書籍を集めて「並行読書」を各学年で推進している。

自尊感情があまり高くないことも課題だ。「自分に良いところがあると思う」の肯定率が低かったことから、少し努力をすれば達成できそうな目標を、学習、運動、生活のそれぞれで立て、進捗状況を担任と家庭で見守るという取り組みも行っている。

2年目は単元を変えて表現力と指導力を伸ばす

2014年12月の佐野市総合学力調査では、前年度と比べて「記述力」

や「書く力」はあまり伸びていなかった。しかし、2015年4月のとちぎっ子学習状況調査では、各教科で県平均や市平均を上回るという成果が見られるようになってきた。

「1年間の取り組みですぐ学力に結び付くものではありませんが、どの学年でも書くことが好きな子どもが増え、学級での話し合い活動も盛んになってきています」(津布久校長)

研究2年目の今年度も1年目と同じ、「国語科における単元を貫く言語活動の明確化」をテーマとした研究を進めている。昨年度はどの学年も説明文の単元を取り上げたため、子どもの発達段階に応じた指導のあり方という縦のつながりがよく見えるという成果もあった。しかし、今年度は昨年度とはあえて単元を変えていると、印出先生は話す。

「良い授業を見せることが、研究授業の目的ではありません。教材開発の手法を身に付け、どんな教材文でも柔軟に指導できるようになることが大切です。今年度は、『読んだ本のキャッチコピーをつくる』(5年生)、『町のよさを伝えるパンフレットをつくる』(6年生)など、より多様な表現力を取り上げています。子どもたちの意欲をより引き出す授業づくりを進めていきたいと思っています」



佐野市立植野小学校 校長

津布久貞夫

つぶく・さだお

「あいさつ、立腰、整理整頓をきちんと出来る子どもを育てたい」



佐野市立植野小学校

印出知子

いんで・ともこ

学習指導主任。「子どもの楽しい、好きという気持ちを大切にすれば、学力は伸びていくと信じて指導する」

中学校での実践

調査結果を生かしながら 既存の取り組みを見直すことで 改善につなげる

佐野市立南中学校

◎ 1947（昭和22）年創立。「賢く、強く、優しい南中生」を目指す生徒像とし、三つの躰（あいさつ、返事、整理整頓）、二つの言葉（ありがとう、ごめんなさい）、立腰（生活の基本姿勢）の指導を推進する。

校長 石島信幸先生

生徒数 426人

学級数 16学級（うち特別支援学級2）

住所 〒327-0835 栃木県佐野市植下町1205

電話 0283-23-0869

URL <http://www.schoolnet-sano.ed.jp/minami-j/>



11月に中間評価を行い 課題を確実に改善する

佐野市立南中学校は、植野小学校と同様、2014年度から2年間、佐野市教育委員会「学習指導研究推進校」の指定を受け、学力向上の研究を進めている。研究推進に際しては、「学びの基礎力向上部会」「社会的実践力向上部会」「分かる授業実践部会」「調査、啓発及び評価部会」の4つを設置した。いずれもメンバーは7～8人で、教員全員がいずれかの部会に所属。ミドルリーダーをチーフに、ベテラン教員をアドバイザーとして配置した。研究主任の山中順二先生は、次のように説明する。

「市の調査で学力向上の基本構成モデルとして挙げられた『学びの基礎力』『社会的実践力』『教科学力』をそのまま部会にし、加えて、学力調査や生徒・保護者のアンケートなどを集約・分析する部会を設けました」

研究の進め方は次のとおり。まず各部会が、国・県・市の各調査結果を分析し、佐野市の平均より低い設問を中心に、課題とその具体策を夏休み中に検討。4つの部会の具体策を「学力向上改善プラン」にまとめ、全校で共有し、9月から実践した。

11月には中間評価を実施。それぞれの具体策について、自分はどのように実践したのか、その実践に対する感想や評価、生徒の様子などを教員一人ひとりが提出し、山中先生が取りまとめて一覧表にした。各部会は、そこで挙げた成果と課題を検討し、具体的な改善策をピックアップ。それをまた12月以降に実践し、年度末に成果と課題を「学力向上改善レポート」にまとめた。

「年度末に1回評価するだけでは不十分だと考えました。年度を越えると異動がありますし、教員の気持ちも切り替わってしまいます。年度途中で中間評価をし、年度内に改善を

図る。そのようにして着実に取り組みの質を上げようと思いました」と、石島信幸校長は強調する。

研究2年目の今年度は、前年度の結果を踏まえて研究推進のタイムテーブルを年度当初に示し、PDCAサイクルを回せるようにした。

同校では教員の自己評価や生徒への授業アンケートも年度途中と年度末の2回行い、指導力向上のためのPDCAサイクルを回している。

めあての掲示、「鑑ノート」と 既存の取り組みを生かす

各具体策をどのように実践し、改善につなげているのかを見ていこう。

まず、各種の調査で「授業の初めに目標が示されている」という項目について、生徒の評価が低いことに着目。以前から、教員は授業の初めに学習目標を示すようにしていたが、生徒はそう受け止めていないことが分かった。そこで改善プランの中で、毎回の授業冒頭に「めあて（目標）」を必ず示すことにした。

11月の中間評価では「生徒が目的を意識するようになり、教師自身も再確認できる」との声が上がり、12月の市の学力調査でも、「めあてが示されている」と答えた割合が95.5%と、前年度から7.2ポイント上昇した。

更に2015年度は、より浸透させるために、教員によってまちまちだった掲示の仕方を統一。黄色のチョークで目標を書いて、赤い線で囲み、到達目標も「〇〇しよう」という表現に統一することとした。

また、「振り返り」というプレートを黒板に貼っておき、授業中や終わりに必ず振り返りを行うようにした。

「全ての授業で、前時までの振り返り→目標の確認→学習→本時の振り返りという、生徒にとってのPDCAサイクルが出来るようになりました」

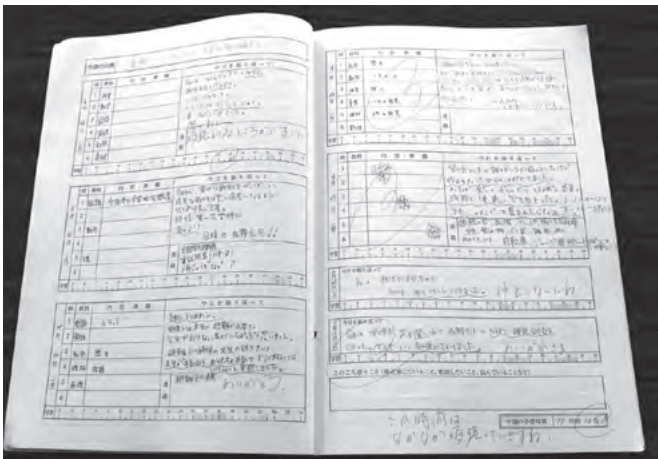


写真2 2015年度の「鑑ノート」は、「今日を振り返って」の欄に、たくさん文章を書けるように、1日分のスペースを拡大した。担任は毎日チェックし、コメントを添えて返却する。

と、山中先生は評価する。

また、家庭学習時間が県や市の平均と比べて大幅に少なかったことから、生徒向けの「家庭学習の手引き」を教科ごとに自主学習の進め方を紹介する内容に改訂し、生活記録を記す「鑑ノート」に学習時間を書かせるようにした。併せて、各教科で予習となるような宿題を出したり、小テストの回数を増やしたりして、家庭学習に意識が向くようにした。

すると、12月の市の学力調査で、家庭学習時間が全体的に増加し、家庭学習時間が30分以下の生徒が、前年度比で約14ポイントも減少した。そうした成果を受け、2015年度は「鑑ノート」を更に改訂。サイズをB5判からA4判にして、「今日を振り返って」の欄を拡大し、家庭学習時間の1日分と1週間の合計を記入する欄を新たに設けた(写真2)。学習時間の合計は、クラス単位で集計し、担任の学習指導にも生かしている。

こうして高まった改善への意識は、他の取り組みも変えている。

以前から行われていた、校長が生徒を表彰する「みなみ賞」「けやき賞」は、2014年度に煩雑だった手続きを簡略化した。すると、みなみ賞1516人、けやき賞313人と、受賞者が大幅に増えた。

「みなみ賞は善い行いをした生徒

に、けやき賞は良いことを継続した生徒に贈ります。担任が推薦した生徒に、月1回、私が賞状を手渡しています。ハードルを下げて、善い行いがすぐ認めてもらえるようにすることで、生徒を伸ばしていけると考えました」と、石島校長は語る。

このように、同校の取り組みの特徴は、新しいことに飛びつくのではなく、既存の取り組みを改善し、効果を上げている点にある。

「慣習として行っていたことを、もう一度見直す。しかも、教員の思い込みで進めるのではなく、分析結果や実態に基づいて進める。そうすることによって、成果が上がりやすくなるのだと思います」(石島校長)

生徒の表現力、 教員の指導力向上にも着手

2015年度は、活用問題の無答率が高いという表現力の課題や、教員の指導力アップの課題にも取り組む。

表現力の向上については、まず朝読書を読書に特化した。「読書ノート」に感想文を書きためていき、各自がその中から1冊を選んでビブリオバトル(*)を行う予定だ。

「ビブリオバトルは、朝読書に目的意識を持たせるとともに、インプットしたことをアウトプットする機会として設けました。昨年度にクラス

単位で行ったところ、好評だったので、2015年度からは全校で行うことにしました」(山中先生)

「鑑ノート」の「今日を振り返って」の欄も、2015年度からは学校行事やその時の社会の出来事などのテーマを与えて書かせている。これまで、「疲れた」「普通だった」など単語でしか書かない生徒が目立ったため、日頃から自分の考えを書くことに意識を向けさせるようにしたのだ。

教員の指導力向上については、授業の板書を撮影し、そのデータをためて、誰でも見られるようにする「板書ライブラリー」を始めた。目標は1教科につき年間100枚だ。専用のデジタルカメラで撮影しておけば、後は山中先生がまとめて教員の共有サーバにアップする。

「本校には、毎年新任教員が配属されます。これを見れば板書の勉強になりますし、ベテラン教員も自分の板書を振り返る機会になります。実際、教員の意識も高まり、各クラスを回って見ても、『めあて』『振り返り』が徹底され、板書が構造化されて、授業が分かりやすくなってきていると実感します」(石島校長)

更に改善を重ねるとともに、研究指定終了後もこの好循環を継続する体制を整えていく考えだ。



佐野市立南中学校
校長

石島信幸

いしじま・のぶゆき

「中学時代は自分らしく生きていく土台を築く時期。生徒の生きる力の根幹を育てていきたい」



佐野市立南中学校

山中順二

やまなか・じゅんじ

研究主任。1学年主任。「先生方がやって良かったと思える研究にする。それが生徒たちの学力につながる」

*京都大の研究員だった谷口忠大氏(現立命館大准教授)が2007年に考案した、いくつかのルールに基づく読書会。「知的書評合戦」とも呼ばれる。